

低学年 分科会 B (中河内)

授業者 坂口 貴大 柏原市立柏原東小学校

秋山 友樹 枚方市開成小学校

司会者 山口 優子 八尾市立南山本小学校

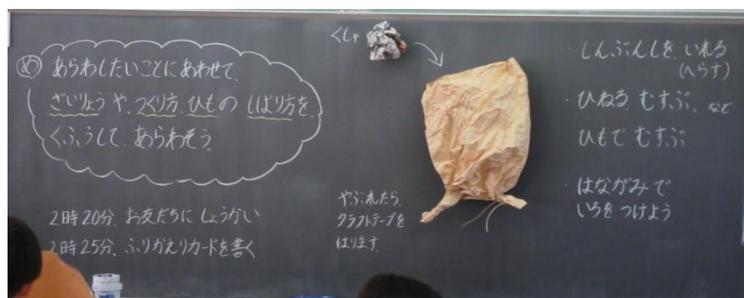
記録者 岡本 恵理子 八尾市立上之島小学校

助言者 渡邊 美香 大阪教育大学 表現活動教育系 美術書道教育部門 准教授

## 1. 授業者より

『くしゃ、ぎゅ、なにができるかな』

前日に事前授業に行き、子どもたちと対面したが、どの児童も人懐っこく、図工に対して前向きな姿勢が見られた。



今回の授業内容に至った経緯としては、習字で出たごみを捨てる際に、その大量のごみを造形活動に使えないかと考え、スーパーマーケットの袋や紙袋など、様々な代替の材料を検討してみた。そこで、子どもたちにあまり馴染みのないクラフト紙を利用することで、これまでにない表現活動につなげようと考えた。ただ、クラフト紙とひもでは、単一な色合いになるため、様々な色の花紙をのりで貼ることで色彩表現の幅を広げることにした。



反省点として、まず1つ目は、活動の見立ての甘さである。「形を作る」という活動に絞ってみても良かったのではないかと感じた。最初の児童の発言で、具体的にキャラクターが出てきてしまったことで、多数の児童が動物に見立てた形を作ってしまったため、導入時の言葉がけの難しさ



が課題だと感じた。次に2つ目は、2年生の児童にとってひもを結ぶことの難しさが浮き彫りになってしまった点である。最後に3つ目は、花紙をのりでくっつける際に薄くて破れてしまった点である。

『ならべて つんで つなげて』

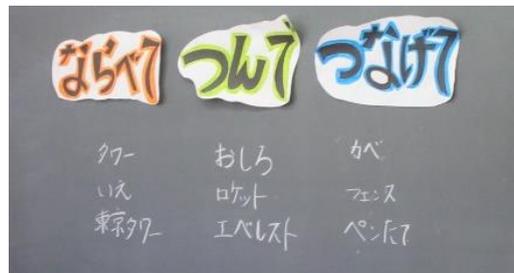
大切にしていることの1つ目として、導入が挙げられる。「紙コップ」と言えば、工作を思い浮かべる児童が多くいる中で、いかにして造形遊びのテーマへつなげるかである。今回も、穴を開ける、ボンドを使う、

などの発言があったが、どんどんテーマを狭めていき、紙コップだけで何ができるのかを考えさせ、児童から自然と出たテーマにつながる言葉「並べる」「積む」「つなげる」という発想へもっていくかがポイントであった。

2つ目として、紙コップの量の多さである。今回は1万個を使ったが、大量の紙コップが入っている段ボールを開けた際の驚きが、これから始まる活動のやる気につながったと言える。

3つ目として、十分な広さの確保である。児童の満足度のためにも、理想は体育館ほどの広さを必要とするが、今回は教室と下足前のスペースを使って行った。

反省点としては、まず1つ目に教室の狭さが挙げられる。故意で壊した、壊していないなどの児童間でのトラブルがあったことや、十分な広さがなかったために世界観が狭まり、発想が乏しくなってしまったことである。十分な広さがあれば、児童の発想をもっと引き出すことができていたのではないかと考えられる。2つ目に、失敗して壊れた際に、泣いてしまう児童がいたことである。たとえ壊れても、そこから別の作品を作



っていくなど、次に活かすことを提案できたら良かった。

## 2. 質疑応答

『くしゃ、ぎゅ、なにができるかな』

Q 第1次で新聞紙をクラフト紙に入れる作業を済ませておくのはどうか。

A 第1次で入れる作業を済ませておくと、第2次で様々な発想を広げる時間をしっかり確保できたかもしれない。

Q 2年生の力ではクラフト紙をしぼる力がないのではないか。また、結び方をよく分かっていない児童が多かったのではないか。

A クラフト紙にもいろんな種類があるが、発注したものが思っていたよりも硬かった。結ぶことについては、蝶結びや固結びが自分でできない児童が多くいた。結ぶ際に自分なりに試行錯誤を重ねることで自ら縛り方を発見するのも経験の1つとなったのではないかと考える。

『ならべて つんで つなげて』

Q 評価については、3つの観点（「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」）のうち、どれを重点的に考えているか。

A 「主体的に学習に取り組む態度」が一番重要だと考えている。難しいと感じるのは、「思考」に関する部分で、単純な作品だが大きい、など見栄えだけが良い作品の場合は評価をどうするべきなのかについては、常に悩むところである。

Q 評価にタブレット端末は使うのか。

A 普段であれば、作品をタブレット端末で写真を撮って、ロイロノートで送らせている。また、「協力できた。」「考えることができた。」など簡単な項目をチェックして提出させている。

教師側で写真を撮り、後日振り返りをさせている学校もあるが、写真を撮る際の正面が、教師が思う視点と児童が思う視点が違っていることがあるので、写真に残す際は、児童

に任せるのが最適かもしれない。

### 3. 指導助言

この日の授業に向けて、児童との関係作りはなかなか難しいものだったと思う。

図画工作の分野においては、人格形成が深く関わっている。子どもの発達段階に応じて、図画工作で何ができるのか、感覚機能をどれだけうまく使うかが重要である。低学年の時に感じられなかったことが、学年が上がるにつれて感じられるようになり、新しい発見をしながら、感じ方が変容していくという実感が大切だと言える。

今回の授業で、空間作りに関しては、『ならべて つんで つなげて』では「床で学習する」という環境が非常に良かった。『くしゃ、ぎゅ、なにができるかな』では、机に対して作品が大きいように感じたので、床で学習することで十分な広さを確保しても良かったように感じる。経験の少ない児童において、様々な材料と出会わせることが肝心で、図画工作を通して、ものに関わっていくプロセスを大事にしたい。

また、様々な経験やアイデアを他の児童と共有していくことや、集中して作っている時でも、一旦中断して全員で共有する時間を設けることを大切にしてもらいたい。写真を見せるなどメディアの活用があっても良かった。制作に向けて集中することは非常に大切であるが、見て感じる、つまり、制作したものを一旦引いて見てみるのが最も重要だと考える。よく見て感じ取ることができると、次にどうするべきかを考え、今後の見通しをもつことができるようになり、高学年に向けてその力が養われていく。

図画工作では、時には意見のぶつかり合いやもめ事が生じることがある。「欲」つまり「欲望」は言い換えれば「主体的」なことでもあり、人間らしい欲・感情のぶつかり合いはごく自然なことである。こうしたシチュエーションが起こってしまうことは、児童にとって良い学びになり、心身のコントロール、つまり中学年・高学年へ向けての社会性を学んでいく成長のための良い機会と捉えることができる。このように、図画工作は人格形成につながっているという点で、道徳教育とも深く関連していると言える。